

<b>Title</b>	旧制第一高等学校校長時代における新渡戸稲造の指導者教育論：『校友会雑誌』を中心にして
<b>Author</b>	山本 慎平
<b>Citation</b>	経済学雑誌, 115 卷 4 号, p.47-68.
<b>Issue Date</b>	2015-03
<b>ISSN</b>	0451-6281
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学経済学会
<b>Description</b>	
<b>DOI</b>	

Placed on: Osaka City University

# 旧制第一高等学校校長時代における 新渡戸稲造の指導者教育論

——『校友会雑誌』を中心にして——\*

山 本 慎 平

## 目次

### はじめに

#### I. 一高における籠城主義と個人主義の対立と新渡戸の校長就任

#### II. 主要著作における新渡戸の人格主義とソシアリティー

##### (1) 「縦の関係」としての人格主義

##### (2) 「横の関係」としてのソシアリティー

#### III. 一高における新渡戸の指導者教育論

##### (1) 人格主義と to be の重視, 具体的修養

##### (2) ソシアリティーと作法

##### (3) デモクラシーの基礎としての自治の重視

##### (4) 教育論—パブリック・スクール教育と普通教育

##### (5) 新渡戸の指導者教育の成果及び指導者と民衆との関係

### おわりに

## はじめに

本稿の目的は、旧制第一高等学校時代の新渡戸稲造の修養論、教育論を考察することによって新渡戸の描いた指導者像について明らかにすることである。前稿において筆者は新渡戸の1919年（大正8年）におけるデモクラシー論を分析した<sup>1)</sup>。新渡戸はそこでデモクラシーの重要な要素として「指導者の役割」と「民衆の指導者を選ぶ眼識」を挙げた。新渡戸は「民衆の

---

\* 本稿作成にあたりご助言を頂いた佐藤光大阪市立大学名誉教授、大島真理夫大阪市立大学教授、そして本誌審査員の皆様に深くお礼申し上げます。また本稿は日本経済思想史学会例会（2012年12月15日）、日本思想史学会2013年度大会（2013年10月20日）、経済社会学会西部部会（2013年11月30日）における報告をもとにしたものです。報告の機会を与えてくださった各学会と、貴重なコメントを頂いた諸先生方に深くお礼申し上げます。もちろん、有り得べき誤りは全て筆者の責任に帰せられるものであります。

1) 山本慎平（2012）

指導者を選ぶ眼識」として人格の観念を養うことを重視する。つまり「万民挙げ上下を論ぜず、男女の区別なく、職業の何たるを問はず、教育才能をも論ぜず、相互の人格を尊重する態度」を持つことの必要性を説くのである<sup>2)</sup>。新渡戸は明治末期から大正のはじめにかけて『実業之日本』に頻繁に修養論を書き、それは『修養』(1911年)や『世渡りの道』(1912年)として単行本化され当時のベストセラーとなった。そこで人格の重要性を説いた理由は、デモクラシーの時代に相応しい自律した国民を育成するためであったと言える。それではもう一方の「指導者の役割」というものはいかなるものであろうか。新渡戸は地位や貧富の差にとらわれない人格としての平等を主張する一方で、階級や財産の不平等を含む現状の社会秩序の急激な破壊、革命には反対し、むしろそこに社会安定化の要素を見出している<sup>3)</sup>。もちろんデモクラシーを歓迎した新渡戸が封建社会のような世襲の支配階級による政治を容認したとは考えにくい。だが、新渡戸がデモクラシーの要素として「指導者の役割」を挙げている点からも新渡戸に何らかの政治的指導者像があったのは確かである。新渡戸は『実業之日本』に修養論を書いていたほぼ同じ時期に、旧制第一高等学校の校長を務めていた。言うまでもなく一高は天下のエリート中のエリートが集まる学校である。この時期の新渡戸の一高生に対する修養論や教育論を検討し、それを『修養』や『世渡りの道』といった主要著作における修養論と比較することで新渡戸の考えていた「指導者の役割」を明らかにすることが本稿の目的である。それによって新渡戸のデモクラシー論の全体像をつかむことを目指す。結論から言えば、新渡戸は一高生に対しても人格観念の重要性を説いたが、さらに指導者としての文明的な作法を身につけ、そのような資質のもとで彼らが自治的団体の発展に寄与し、デモクラシーの指導者となることを願ったのであった。

もちろん、新渡戸の修養論についてはこれまで多くの研究がなされてきた。以下では先行研究について、『修養』や『世渡りの道』といった一般民衆向け主要著作における修養論に関するものと、一高での修養論、教育論に関するものに分けて見ていきたい。例えば、武田清子は新渡戸が民衆へ説いた修養概念は当時の修養の多くが国家に従順な臣民を作ることを目的としたのと異なり、「人格的主体としての人間形成」を目指すものであったと指摘する<sup>4)</sup>。そしてその方法を、日本の精神的伝統にキリスト教の真理を受肉しようとする「接木型」に分類している<sup>5)</sup>。西村稔も武田の主張を基本的に受け継ぎつつ新渡戸の修養論は<キリスト教の和化>を目的としていたと述べている<sup>6)</sup>。

---

2) 新渡戸稲造(1919a)504頁。以下『新渡戸稲造全集』に収録されている著作、記事については全集のページ数を記載する。

3) 新渡戸(1912)100-101頁。

4) 武田清子(1967)45頁。

5) 武田(1967)10頁。

6) 西村稔(2005)98頁。

これに対して、一高校長時代の新渡戸の修養論については、第一に一高の籠城主義との対決と、第二に後の教養主義との関係から評価される事が多い。例えば第一の点については既に多くの伝記的研究や一高の自治寮史、研究論文が、新渡戸が人格主義やソシアリティーを説いて一高の籠城主義を改めようとしたと指摘している<sup>7)</sup>。例えば小林竜一は木下校長、狩野校長のもとで受け継がれてきた「籠城主義」の伝統を評価しつつ、新渡戸がそこに「社会的連帯」(ソシアリティー)を導入したことを「近代日本における思想史的分水嶺」と評価している<sup>8)</sup>。この点は重要な指摘であり筆者も同意するところである。ただしソシアリティーに「社会的連帯」という訳をあてている点については、新渡戸が人と人との実際の交際の仕方や作法を問題にしている点をふまえれば、そのまま社交や社交性と訳すほうがその実態を的確に表現できると考える。本稿ではそのような観点からソシアリティーについて検討している。第二の教養主義との関係について、筒井清忠は日本のエリート文化としての教養主義が大衆文化としての修養主義から発生したことを指摘し、その契機を新渡戸が一高の校長に就任し、一高生に向けて修養を説いたことに求めている<sup>9)</sup>。また竹内洋も教養主義成立の過程で校長新渡戸の影響を指摘している<sup>10)</sup>。ただし、新渡戸の修養と後の教養主義との相違点にも注意が向けられており、例えば筒井は新渡戸の修養を社会的実践を含んだものとして、古典や哲学の読書により人格の完成を目指すケーベル流の教養とは区別しているし<sup>11)</sup>、竹内久顕も新渡戸の教養における実践性を強調している<sup>12)</sup>。

新渡戸の修養の社会性、実践性については他にも、西村稔がヨーロッパにおける教養と作法との結びつきの文脈で新渡戸の修養論を詳細に検討している。西村によれば西洋、特にイギリスやフランスの教養には日本で一般的に使用される意味での教養(古典と哲学による人格の完成)の他に外面的な作法が含まれており、新渡戸の修養は西洋の伝統的教養を受容する形その中に作法を含んでいた<sup>13)</sup>。それではこういった実践や作法を含む修養は新渡戸の指導者像とどのように関わっていたのか、言い換えればなぜ新渡戸は一高生に作法を説いたのであろう

---

7) 伝記的著作をすべてあげることは出来ないが、最初期のものとして石井満(1934)第12章、最新のものとしては草原克豪(2012)第4部第8章などを参照。一高の自治寮史は一高自治寮立寮百年委員会(1994)、研究論文は小林竜一(2011)などを参照。

8) 小林(2011)85頁。なおこの小林の研究は前述石井(1934)の成果に拠るところが多い。

9) 筒井清忠(1995)第1章。

10) 竹内洋(1999)第4章、竹内洋(2003)39頁。

11) 筒井清忠(2009)31頁。この点については武田も同様の指摘をしている。武田(1967)139頁参照。

12) 竹内久顕(2009)73-75頁。

13) 西村稔(2000)586頁、西村稔(2008)5頁。なお作法とは、ここでは「人間の外面(声、歩み、身ぶり、四肢の運動)、日常的事物や日常的欲求(食事、衣服、住居、家具)、飾り立てることや楽しみや気晴らしに関わる『外面的習俗』とされている(西村(2000)586頁)。ヨーロッパ文明と作法との関係については木村俊道(2010)も参照。

か。この点を明らかにするためには、一高における新渡戸の修養論や教育論について詳しく検討していく必要がある。

しかし、主要著作における修養論とは対照的に、一高校長時代の新渡戸の修養論、教育論にはまとまった資料がなく、これまで十分な研究がなされて来たとは言えない。先の西村の研究も一高における新渡戸について触れているものの、主要著作における修養論の考察に多くの紙幅が割かれている。全集の『新渡戸博士追憶集』や新渡戸の教え子の証言からある程度の新渡戸の発言や行動はわかり、それはそれで重要な資料となるが、それだけでは新渡戸の指導者像の全容を知るには十分ではない。よって、以下では一高の『校友会雑誌』に記録されている新渡戸の演説を中心に、新渡戸の修養論や教育論を考察することで彼の指導者教育論に迫りたい。ただし『校友会雑誌』における新渡戸の発言については宮坂廣作による詳細な研究がある<sup>14)</sup>。宮坂の研究は新渡戸の説いた修養論、教育論に対する学生の反応や論争を丁寧に追っており貴重である。一方で、新渡戸の作法論の分析や、指導者教育と大衆教育との比較という点には重点が置かれていない。指導者教育と大衆教育との比較という観点から新渡戸の修養論について研究したものとしては森上優子の研究が参考になる。森上は新渡戸の社会教育（大衆教育）と学校教育（指導者教育）の類似性を指摘し、「新渡戸の説いた『修養』概念は、基本的に社会教育と学校教育の間には相違は認められず、その内実は『善』『同情心』を互いに発揮すること、すなわち『社交主義』による人間社会の『調和』を目指すもの<sup>15)</sup>であったと結論づけている。しかし、新渡戸がデモクラシーにおける「指導者の役割」を重視した事実から考えると、彼の社会観において、一高生のような将来の指導者に期待した役割というものがあったはずである。本稿では、そのような観点から、新渡戸の指導者教育と大衆教育との類似性ではなく、その違いに注目したい。Ⅰでは新渡戸が一高校長に就任し、『実業之日本』に修養論を書いていた時期の時代背景について俯瞰する。Ⅱでは、『修養』や『世渡りの道』といった主要著作における修養論について検討する。Ⅲでは、一高校長時代の新渡戸の修養論を分析し、それを主要著作におけるものと比較しつつ、新渡戸の理想とした指導者像を明らかにしたい。

## Ⅰ. 一高における籠城主義と個人主義の対立と新渡戸の校長就任

新渡戸は1906年（明治39年）から第一高等学校の校長に就任し、1913年（大正2年）まで校長を務めることになる。また新渡戸は1909年（明治42年）から通俗雑誌『実業之日本』の編集顧問となり、そこに庶民のための生活訓や道徳訓を頻繁に掲載し、その記事を集めて『修養』（1911年）や『世渡りの道』（1912年）や『自警』（1916年）を出版し、これらは当時

---

14) 宮坂廣作（1999）

15) 森上優子（2004）173頁。

のベストセラーとなった。この時期の新渡戸は、一般青年とエリート青年の両方にとっての教育者であったと言える。

明治20年代の一高は「寮自治」と「籠城主義」の時代であった。時の校長木下廣次は、自治寮の創設にあたって「世の悪風に染まらずに修学するには、籠城の覚悟がなければならない」と籠城主義を掲げ、その前提として皆寄宿舎制度の導入を進めた<sup>16)</sup>。これに加えて、日本的な書生の伝統と明治中期の国粹保存主義の影響を受けて、国家主義や弊衣破帽や蛮カラを至上とする校風を一高生は築き上げていた。しかし、明治30年代後半に入ると、成熟した社会の中である種の停滞感が生まれ、若い世代の中に煩悶青年が出現する。一高においても、個人主義的な学生グループから従来の校風への異議が唱えられる。1905年（明治38年）10月、新渡戸が一高校長に就任する前年、一高生魚住影雄は『校友会雑誌』において籠城主義を「哀れむべき保守思想」として皆寄宿舎制度廃止を主張した<sup>17)</sup>。これに端を発し校風をめぐるこれまでの籠城主義派と魚住らの個人主義派が激しく争った。新渡戸が一高に赴任したのは一高のこれまでの籠城主義がまさに挑戦を受けている時であった。

これまで多くの伝記的著作や一高の寮史、先行研究で指摘されているように、新渡戸は一高に新しい校風を持ち込もうとした。例えば森戸辰男は一高の教育方針として新渡戸は「武士道を理想的なものとして鼓吹せず、むしろその欠陥とも思はれる パーソナリティー 人格・カルチャー 教養・ソシアリティー 社交性等を強調された<sup>18)</sup>と回想している。新渡戸の前任校長として長く在任したのは狩野亨吉であったが、狩野校長は従来の勤儉尚武の校風の体現者であった。それとは対照的に、籠城主義の校風に、人格主義や社交を持ち込んだのが新渡戸であった<sup>19)</sup>。

以下では、一高における新渡戸の修養論、教育論を見ていく前に、『修養』や『世渡りの道』といった一般民衆向け主要著作を通して新渡戸の説いた人格やソシアリティーについて見て行きたい。というのはこれらの主要著作のほうが新渡戸のまとまった考えが表明されているし、また一高における修養論との比較のためにはまず主要著作における修養論を検討しておくことが必要だからである。

## Ⅱ. 主要著作における新渡戸の人格主義とソシアリティー

以下ではまず、新渡戸の修養論を『修養』（1911年）や『世渡りの道』（1912年）を中心に見ていく。『修養』や『世渡りの道』における新渡戸の修養論については冒頭で触れたように、相当の研究がある。ここではそれらと重複する部分もあることを断りつつ、新渡戸の一

16) 一高自治寮立寮百年委員会（1994）73頁。

17) 一高自治寮立寮百年委員会（1994）77頁。

18) 前田多聞、高木八尺編（1936）299頁。

19) 一高自治寮立寮百年委員会（1994）94頁。

高における修養論との比較のために主要著作における修養論の特徴を見極めたい。一読すればわかるように、これらの著作では貯蓄法や読書法など非常に卑近で具体的な事柄が多数紹介されている。ただし新渡戸の修養はこういった具体的生活訓の単なる寄せ集めではなく、そのような具体例の中に新渡戸の伝えようとした本質的な部分を読み取ることが可能である。その一つは人格の観念の確立であり、もう一つはソシアリティーである。

### (1)「縦の関係」としての人格主義

新渡戸は修養の序文で、「一体修養と云へば個人の人格の向上を旨とし」<sup>20)</sup>と述べており、新渡戸の修養が人格の向上を目指すものであったかがわかる。では新渡戸の言う人格の観念とはいかなるもので、それはどのようにして獲得でき、またそれによってどのような効果が期待されるのか。新渡戸は『修養』の中で、「縦の関係」と「横の関係」について論じている。これは新渡戸の修養論の基本構造を簡潔に表現している。「縦の関係」とは人間と人間以上のものとの関係である。日本人は他人にどう見られているかを強く意識する、つまり「横の関係」を重視する。しかし「人は人間と人間とのみならず、人間以上のものと関係がある」「我々はたゞに横の空気を呼吸するのみで、活るものでなく、縦の空気をも吸ふものである」<sup>21)</sup>と新渡戸は「縦の関係」の重要性を喚起する。新渡戸はここで人格という言葉直接使用していないが、人格の観念を認識するためにはこの人間と人間以上のものとの関係を結ぶことが決定的だと新渡戸が考えていたことは間違いない。というのも、この人間以上の絶対的なもののもとにはじめて、人間は地位や貧富の差にかかわらず、人格としてみな平等であるという観念が生まれるからである。よって新渡戸が修養の中で最も重視したのは、日本人の中にこの「縦の関係」を養うことであったとすることができる。そしてこの人格の観念が重要であるのは次の二点による。第一に、先ほど述べたようにこの人間以上のもののもとに相互の人間が人格として平等であるという観念を養うことができる。第二に、「我は我たり」という気概のもとでウェーバーがプロテスタンティズムの倫理に見たような日々の行為における意志の強さを獲得することができる<sup>22)</sup>。

ではこのような「縦の関係」を養うためにはどうすればよいのか。新渡戸の言う「縦の関係」

---

20) 新渡戸 (1911) 31 頁。

21) 新渡戸 (1911) 70 頁。

22) 新渡戸 (1919b) 544 頁, 新渡戸 (1934) 564 頁。晩年の記述であるが、新渡戸は「人格の意義」の中で、西洋における人格について次のように語っている。西洋ではキリスト教の三位一体の教義によってキリスト教を信じるものはパーソンということについて相当の知識を得なくてはならなくなった。そして、西洋人は「神もパーソン、我もパーソン。」といて、非常に人間の位を上げるとともに、全智全能なる神と、何事にも至らない自分のパーソンとを始終較べて、己をより向上させることに努めている。(新渡戸 (1934) 563-564 頁)



はキリスト教の神と人間との関係から来ていることは間違いない。新渡戸が信仰していたキリスト教クエーカーの教えは、教会や教義を重視せず、神と人間が直接交わることができる<sup>23)</sup>と説く。ただし新渡戸はキリスト教を直接日本に輸入することはしない。新渡戸は「併し僕は必ずしも神と限るのではない。仏教の世尊でも、阿弥陀でもよい、神道の八百万の神でも差問ない。」<sup>24)</sup>と云って、いかなる宗教かということよりも、そのような関係性を結ぶこと自体を重視する。

新渡戸は『世渡りの道』でも、西洋の内面重視の文化と日本の外面重視の文化を比較して、「恥辱の標準を社会上の形式に置くか、又は各自の衷心に置くかによつて、我々の向上の仕方に非常の差違がある」<sup>24)</sup>と西洋の内面重視の文化を高く評価する。この内面重視の文化は絶対者（西洋ではキリスト教の神）を想定しているという意味で「縦の関係」とつながるものである。ところが、新渡戸はここでも西洋の内面の文化を直接模倣させる方法をとらない。「我々は屢々日本人には罪の觀念がないといふ評を聞く。併し是は事実であるとは思はぬ」<sup>25)</sup>と日本にも内面を重んじる文化が存在することを指摘する。新渡戸はそれを武士道の徳としての「廉恥心」に見出すのである。武士道の「廉恥心」は外面に恥ずるというものではない。それは自己が正義を重んずる念より起こり、正義に反するか反しないかということに基準が置かれている<sup>26)</sup>。このように新渡戸は日本人に馴染みのある武士道の用語を使用することによって、西洋的な内面重視の文化を日本に根付かせようとする。

## (2)「横の関係」としてのソシアリティー

新渡戸は日本人に欠けている「縦の関係」を重視したけれども、「横の関係」の必要性も同様に強調した。「横の関係」とはつまり人と人との関係である。人間は全然孤立して存在することはできない。孤立すれば人間は動物的に墮落してしまうから、「厭<sup>あ</sup>くまでも世とともに移り、塵の世に交はりながら、品性を磨き以て人たるの義務を完うせねばならぬ」<sup>27)</sup>。このように新渡戸は修養の方法としての隠遁を批判した。

新渡戸は「人間は団体を結び、共に生存せねば、その天性を充たすことが出来ぬ」と言い、この横の関係を、ソシアリティー<sup>28)</sup>と呼ぶ。このソシアリティーはカタカナで表記されているように、西洋から取られた概念であった。新渡戸はこれを日本人に理解しやすいように儒教的な礼という概念を使って説明する。「人間が共同生存せんとする性質をソシアリチー（共同

23) 新渡戸 (1911) 58 頁。

24) 新渡戸 (1912) 310 頁。

25) 新渡戸 (1912) 305 頁。

26) 新渡戸 (1912) 139 頁。

27) 新渡戸 (1912) 7 頁。

28) 以下ではソシアリチーと表記されている場合もあるが、引用部分以外はソシアリティーで統一する。



生存する性質)と称し、人類をして今日の程度に発達せしめた最高の性格である。[中略]昔の君主が教へた礼といふことは、つまりこのソシアリチーのことであると思ふ<sup>29)</sup>。ここでも新渡戸は、西洋の「罪」の文化を日本の「廉恥心」と比較したように、ソシアリティーを日本人になじみ深い礼という言葉で説明していることに注意しておきたい。このような西洋的価値の輸入の方法は、武田清子が「接ぎ木型」と呼び、西村稔が<キリスト教の和化>と呼んだものである。

では新渡戸の言う「横の関係」とは具体的にはどのようなものだろうか。新渡戸は西洋人と日本人の人間交際の違いを強調する。聖書には「汝心安かれ」(Be of good cheer)という言葉が頻繁に出てくる。このことは、チアフル、つまり明るいか陽気であることに西洋人が非常に重きを置いていることを示している。しかし、日本人は『チアフル』の人を見ると、他人に阿るとか、御機嫌取りをするとか、八方美人であるとか非難<sup>30)</sup>する。

しかしこれは日本人が礼儀を知らないということではない。日本ではむしろ礼儀作法をやかましく言う。日本人は儒教的な形式主義の伝統が強く、内と外といった関係や、地位や貧富の差によって礼を区別する。このことが、身内には親切だが、ひとたび社会に出て他人と接すると傍若無人な振る舞いをするという悪しき習慣を生んでいる。しかし「礼節はそんなに儀式ばったものではなく、衷心に存する誠意を、外に現はす表情の方法」であり、そしてそれは「人格」に対する礼であるべきである<sup>31)</sup>。このように、新渡戸は日本人の外面重視や形式主義を批判しつつ、西洋流の人格に基づく交際方法を学ぶことを推奨する。

もっとも、新渡戸は礼をこれまでのように地位や貧富を基準として実行することを諫め、人格に対して礼を尽くすことを説いたが、既存の秩序をむやみに破壊することには否定的で、むしろそれを維持しようとした<sup>32)</sup>。例えば、新渡戸は人格に対する礼を強調しながら、地位に対する礼も全く無用のものとは考えない。「一般の心得としては、[中略]人格の上に足らぬところがあっても、地位に対して尊敬の念を起こし、礼節を守る様にするのが宜い」という妥協的な態度をとる。さらに、新渡戸にとって平等とは人格の平等であって、「平等といふと雖ども、社会は平等の間に階級が存在して、秩序が保たれる」のであった<sup>33)</sup>。このような発言からは、既存の社会秩序の破壊に対する警戒を読み取ることができる。このように、新渡戸は人格に基づく西洋流の交際術を評価しつつも、日本の伝統的な慣習や礼儀作法、社会秩序までも容認する態度をとっているのである。こういった新渡戸の姿勢は、一方で当時の流行であった自然主義に対する批判へ向かい、他方でマルクス主義批判へと向かう。そしてそれは一高の蛮

29) 新渡戸 (1912) 112-113 頁。

30) 新渡戸 (1912) 29 頁。

31) 新渡戸 (1912) 77 頁, 82 頁。

32) 西村稔 (2007) 第3節, 第4節。

33) 新渡戸 (1912) 100-101 頁。

カラ主義や弊衣破帽にも向けられていた<sup>34)</sup>。

新渡戸の修養論の核心は「縦の関係」つまり「人間と人間以上のもの」との関係に基づく西洋的な人格観念の確立であったことは間違いがない。そして「横の関係」としてのソシアリティーもこの人格観念に基づくものであった。ただし、新渡戸はその場合にも、既存の礼儀作法や慣習、社会秩序を急激に破壊するという考え方は否定し、それらを容認した。新渡戸の修養論を理解する場合に、この二面性を捉えておくことは重要である。

### Ⅲ. 一高における新渡戸の指導者教育論

以下では『校友会雑誌』に収録されている新渡戸の演説や訓話を中心に利用しつつ、一高における新渡戸の修養論や教育論から彼の指導者教育論を見ていきたい<sup>35)</sup>。一高の『校友会雑誌』は、1890年（明治23年）11月に第一号が発行され、1940年（昭和15年）12月以降は『護国会雑誌』と改名し1944年（昭和19年）6月まで続いた。一高の文芸部によって編集がなされ、雑誌には学生が書いた校風論、文学的哲学的な作品や詩とともに、部報や寮報も掲載されており、特に寮報には全寮茶話会や創立記念祭における新渡戸の演説や訓話が記録されている。そこで、Ⅱにおいて提示した「縦の関係」と「横の関係」という構図も念頭に入れながら、これらの記事における新渡戸の発言を整理して、(1) 人格主義と具体的修養、(2) ソシアリティーと作法、(3) 自治論、(4) 教育論についての四つに分け、それぞれについて新渡戸の主張を検討する。最後に、(5) 新渡戸の指導者教育の成果及び新渡戸のデモクラシー論における指導者と民衆との関係について言及する。ただし(1)については先行研究で既に多く取り扱われているので簡単に論じるに止め、(2)以下を中心に考察することをあらかじめ断っておきたい。なお『校友会雑誌』を中心的資料として使用するが、適宜その他の資料を使って補足してゆく。

#### (1) 人格主義と to be の重視、具体的修養

新渡戸は校長就任直後の「送迎会記事」（160号1906年10月）において「人格とは頭脳を明晰にして心を清くすることである」と述べている。また校長辞任時の送迎会での挨拶でも「日本人に最も欠けているのは Personality（人格）の観念ではなからうか。Personality のない処に Responsibility（責任）は生じない」と語った<sup>36)</sup>。このように新渡戸の一高での教育は人格の観念の育成を目標とするものであった。

34) 西村（2007）第4節。

35) 『校友会雑誌』閲覧にあたっては国立国会図書館関西館、日本近代文学館編 DVD（東京大学駒場図書館所蔵）を利用した。また『校友会雑誌』については引用記事名、巻号、発行年月を本文中に記す。

36) 矢内原忠雄（1940）154頁。森上（2004）171頁も参照。

また新渡戸は一高において to be の重要性を説いた。to be (あること) とは to do (すること) に対比される言葉であり、新渡戸は立身出世や経済的成功といった to do よりも人間としてのあり方や行動の動機としての to be を重視した。この to be と to do との区別は一高以外でも頻繁に言及されており、例えば『修養』では、「仕事をするよりも、大切なことがあると思う。それは仕事の動機である。いかなる動機で仕事をするかということである。[中略] [人生の目的は一引用者] あること (to be) でなすこと (to do) は第二義である」と to be、つまり「動機が潔白であれば、其時は何をしてもよい」という態度をとる<sup>37)</sup>。

こうした新渡戸の to be の重視は、立身出世や家の発展といった伝統的な価値観の中で育ってきた学生たちに大きな衝撃を与えた。南原繁は、新渡戸の to be を重視する教えに接して、これまで自明のものとしてきた儒教的な「名を立て家を興す」という信条と決別した<sup>38)</sup>、矢内原忠雄は新渡戸の講話で「人格の自覚を呼び起こし、個性を開放」する思想に触れたという<sup>39)</sup>。河合栄治郎は一高時代を回顧して「先生によって始めて to do と to be との対立とその取捨を説かれて、個人人格の権威に目覚めたと言ってもよいのであった。」<sup>40)</sup>と述べている。

この to be の重視は仕事や業績といったことから超越した個人の信念や動機を重視するという意味で前述の人間と人間以上のものとの「縦の関係」とつながるものであり、to do は現実社会での行為を意味しており、それはほかの人々との関わりを必然的に伴うものであるから「横の関係」とつながりを持つものであると言える。その意味で新渡戸はやはり「縦の関係」や to be を修養の最も重要な要素と考えていたのである。

ただし新渡戸は to be を重視したけれども決して to be のみを重視したわけではない。新渡戸の to be には必ず行為実践が伴っていた。むしろ新渡戸は行為実践を非常に重視した<sup>41)</sup>。「実際ののことといへば、人は直に卑近の如くに思ふが、其实、実行ほど高く且つ深いものはない」「百の理論よりも一の実行が尊い」<sup>42)</sup>と言ひ、「実行を積んで行けば、其中に含まれる原則が自ら会得される」<sup>43)</sup>のである。同じように、新渡戸は一高においても「学問より実行」や「人生はアクションだ」といった言葉を好んで用いた<sup>44)</sup>。「縦の関係」あるいは to be に裏打ちされた強い理想や意志とそれを実現するためのたゆまぬ実践を説く新渡戸の思想は、当時の煩悶青年に強い感銘と指針を与えた。

さらに、「縦の関係」の重視したものとして、次のような講話も注目に値する。新渡戸は

37) 新渡戸 (1911) 365-366 頁。

38) 加藤節 (1997) 32-34 頁。

39) 関口安義 (2012) 41 頁から再引。

40) 前田多聞、高木八尺編、(1936) 325 頁。

41) 前注 10, 11 参照。

42) 新渡戸 (1912) 178-179 頁。

43) 新渡戸 (1911) 91 頁。

44) 草原 (2012) 246 頁。

「記念祭茶話会記事」(195号 1910年3月)において理想の重要性に触れた箇所、フランスの政治家が書いたある著作を紹介して以下のように述べる。ドイツが今あるのはカントのおかげで、フランスが今あるのもカントのおかげである。カントは「Kategorishcen Imperativ [定言命法—引用者。原文ママ]を主張して、己れに対し、社会に対し、進んでは天に対して行為の標準を規定した」。ドイツの今あるのは彼らの頭脳に浸透しているカントの思想による。フランスにもカントは浸透しているがその「絶対命令」は国民性に合わず、反ってカントの物質的な側面に向かった。フランス人は絶対命令に固執しないから物質界を理想的に見ず、何をしても執着がない。このように新渡戸が「絶対命令」としてのカントの「定言命法」を評価したのは、そこに人間以上の存在との「縦の関係」と通じるものを見たからであろう。一高ではこういった学生が興味をもつような哲学的な訓話が見られるのに対して、『修養』や『世渡りの道』におけるような、キリスト教や武士道の用語を用いた修養論は見られない<sup>45)</sup>。ここからは、宗教それ自体よりも、それが生み出す効果を重視する新渡戸の思想の合理性、あるいは宗教以外のものをも取り込むような「抱擁的な寛容の態度」<sup>46)</sup>を読み取ることが出来る。

以下では、さらに具体的な修養法について見ていきたい。新渡戸は一高においても『修養』や『世渡りの道』で説いたような具体的な修養について頻繁に説いている。例えば、「全寮茶話会記事」(165号 1907年3月)では、寮を清潔にすること、寮生活を愉快にすること、ストームを控えること、修養のために静肅な沈思の時間を取るなどを薦めている。「第一学期全寮茶話会記事」(172号 1907年12月)ではおのれを主張するとともに社会のじゃまにならないように努めなくてはならないという処世術を説く。「全寮茶話会の記事」(175号 1908年6月)では、学生間での活発な議論の必要性を論じる。「茶話会記事(第三学期)」(178号 1908年6月)では、理想の重要性を説き、また友情はパッシブではなくアクティブであると助言する。「第一学期全寮茶話会記事」(192号 1909年12月)では再び寮の清掃について触れている。この他にも、例えば新渡戸校長時代に一高生であった和辻哲郎は新渡戸の修身講話について、「その頃新渡戸先生が修身講和で唱道されたことは、すぐにわれわれの日常生活に現われていったように思う。その一つは日記をつけることである。[中略] もう一つは冷水浴や冷水摩擦のことである」と回顧している<sup>47)</sup>。こういった具体的な修養方法やその語り口は、『修養』や『世渡りの道』といった主要著作に見られるものとほとんど変わらない。

## (2) ソシアリティーと作法

新渡戸自身が『校友会雑誌』において一つのまとまった論説としてソシアリティーについて

---

45) 新渡戸は公式の演説などではキリスト教の講話をしなかったようであるが、キリスト教に関心のあ  
る学生のために特別の会合を設けてそこでキリスト教について論じた。

46) 武田(1967) 34頁。

47) 和辻哲郎(1961) 587-588頁。

論じた唯一のものとして、「籠城主義とソシアリチーとに就いて」(163号1907年1月)という記事がある。新渡戸はこの記事の中で修養団体、特にここでは籠城主義の短所として、(1) exclusive となること、(2) 精神的紐帯がなければただの群居となること、(3) 高慢心を起こすこと、(4) 考えが単調に陥ること、を挙げた。そして、団体の秩序を乱さない限り、異分子を許容すべしとし、籠城主義は means で end ではないと述べる。最後に、ソシアリチーは広義と狭義の二つあると言い、ここで言うのは狭義のもので、それは「長者に交れ」ということであると結んでいる。

ここで新渡戸はソシアリチーは狭義と広義の二つあると述べている。このような区別は、主要著作においては見られないものである。狭義のソシアリチーというのは、自治寮内でのソシアリチーという意味である。例えば、「全寮茶話会の記事」(175号1908年3月)では新渡戸の発言として「寮内にソシアリチー(寮内にのみ限れる意味での)を実行したい」と記録されている。自治寮には全学年の生徒が生活しており、茶話会などでは一高を卒業した大学生たちと触れ合う機会があった。「長者に交れ」と言うのはそのような校友や先輩たちと積極的に交わり意見を交換することを言ったものである。

一方で広義のソシアリチーについての説明は『校友会雑誌』には見られない。この広義のソシアリチーは学校を超えた社会の人々との交わりのことであると思われる。新渡戸が『実業之日本』で説いていたソシアリチーはこの広義の意味であった。しかしもし新渡戸が広義のソシアリチーを一高において説けば皆寄宿舎制を否定することになる。新渡戸がソシアリチーの意味を狭く絞った理由の一つは、その混乱を避けるためであったと想像できる。

さて以下ではもう少しこのソシアリチーについて掘り下げていきたい。新渡戸は『世渡りの道』ではソシアリチーを人格に対する礼であると捉えていた。もちろんその基本的な考えは一高においても変わらないが、さらに一高においては蛮カラ、弊衣破帽といった伝統的校風に代わるものとしてソシアリチーが説かれた。例えば「全寮茶話会の記事」(175号1908年3月)ではソシアリチーについて、互いの中に comfort を入れることだと述べる。comfortable という言葉は日本語のなぐさむ(なぎ、和く、さむは勇む)に相当する。また英国では gentlemanly を gentle (柔和な)と manly (男らしい)に分けるがこういう要素を自治寮の歴史に加えるのは最も良い革新の方法だと言う。新渡戸はここで一高の蛮カラ、弊衣破帽、古武士的な校風に gentle な部分、comfort な部分を入れることをソシアリチーと考えていると言える。このことは、弊衣破帽や尚武、ストーム、鉄拳制裁といった一高の従来的一种野蛮な習慣に、寮の清掃などと合わせて新渡戸が新しい作法、より文明的な作法を導入しようとしたことを意味している。

一高生田中徹は論文「新来諸君の使命を論じて突貫主義に及ぶ」(169号1907年10月)で、「新渡戸先生が二肖像の間に立たれて瞑想を奨めカルチャーを説かるゝに至りて吾が心霊の真空は満たされたり。[中略]新渡戸先生が世界の日本としての国民を教養せらるゝに当りて、

人物の理想か日本の古武士よりは寧ろアングロサクソンのゼンツルメンなるを觀て」と論じている。カルチャーは現在で言う教養とほぼ同義と解釈して良いだろう。ここでは教養という言葉が動詞として使われているが、教育すると言った意味であり、新渡戸はむしろ修養に教養、特にイギリスの教養（カルチャー）の意味を含ませていた<sup>48)</sup>。そしてその理想はイギリスのジェントルマンであったことがわかる。以上のようなソシアリティーの導入は将来の指導者となるべき一高生に必要なものであり、『修養』や『世渡りの道』では強調されることはない。それではなぜ新渡戸は一高においてこのような文明的な作法の導入を重視したのか。この疑問に答える前に、新渡戸が一高において頻繁に説いていた自治について触れておきたい。

### (3) デモクラシーの基礎としての自治の重視

新渡戸は一高においては「狭義」のソシアリティーを説いた。これは皆寄宿舎制度を破壊し混乱を招かないための新渡戸の配慮とも言えるが、一方で新渡戸は自治寮に積極的な意味を見出していた。それは自治寮を日本の自治制度発展に役立てることである。

実際新渡戸の『校友会雑誌』における演説で最も頻繁に話題となるのがこの自治についてである。これは、新渡戸の発言が自治寮の会合でなされたものからして当然とも言えるが、一方で新渡戸が自治制度を非常に重視していたことを示すものである。新渡戸は「第一九回寄宿寮創立記念祭記事」（185号 1909年3月）の中で「自治は政治の根本」で、自治は被治者と治者とを合体させるものであると言う。つまり治者によって治められる国民になるのではなく、自ら治める国民となることが国家発展の基礎であるということである。「第一学期全寮茶話会記事」（172号 1907年12月）でも新渡戸は、自ら治めると自ずから治まるという二つを区別し、前者を健全な自治とした。さらに新渡戸は「第一七周年寄宿寮紀年祭記事」（165号 1907年3月）では自治を「国家の基礎」と捉え、「自治は即ち個人と国家の間に立ちて両者を結ぶ連鎖」、「国家主義」と「個人主義」とを「相融和合」させるものだとして述べている。このような社会観を新渡戸がどのようにして獲得したのかはさらに調べる必要があるが、ともかく、新渡戸が個人と国家との間にある中間集団を重視していたことは間違いない。同じ時期に新渡戸は「地方の研究」を提唱し地方の制度や風俗習慣を研究保存することを説いたが、これは自治制度発達のためであった。このことから新渡戸がこの時期日本の自治制度発展に大きな関心を持っていたことがわかる。しかし日本では地方自治体などの行政団体や学校、教会などの文化的団体を問わず自治が未だ弱いと新渡戸は認識していた。新渡戸はこの自治の精神を涵養する場として一高の自治寮を役立てることを説く。

このような発言から、新渡戸は一高生が自治の精神と経験を自治寮において学び、それを一般社会で実践し、自治制を発展させる指導者となることを願っていたことがわかる。実際自治

48) 筒井（1995）33-37頁。



寮には行政府に当たる総代会、立法に当たる委員会が設置されていた。また擬似国会も定期的に開かれていた。新渡戸がデモクラシー論の中で説いた「指導者の役割」の一つは以上のような自治制度の発展に関わるものであった。

トクヴィルが論じたように、デモクラシーにおいては自治的団体は重要な役割を持つ。もちろん新渡戸のこれらの発言はまだ日本におけるデモクラシー運動が活発化する以前の発言であるが、1905年の日比谷焼打事件以降、民衆の政治的影響力は無視できないものとなりつつあった。その意味では、デモクラシー運動が顕在化する以前から民衆自治の重要性に気づいていた点は新渡戸の慧眼と言えるだろう。

新渡戸はこの自治の精神が最も発達した国としてイギリスを挙げる。新渡戸が自治について述べる場合には必ずイギリスが出てくると言っても過言ではない。以下にその例を挙げる。「第一七周年寄宿寮紀年祭記事」(165号 1907年3月)ではイギリスの覇権が東西両半球にあるのは自治の精神のおかげであると発言している。ここからは、新渡戸が自治を論じる時、国内の自治制の発展だけでなく、海外植民地経営の問題をも視野に入れていたことがわかる。新渡戸が一高の校長に就任したのは、日露戦争後日本が積極的に海外発展を進めようとしていた時期であり、また新渡戸は植民地政策論の第一人者であったことから植民地経営の問題は大きな関心の一つであったに違いない。さらに「第一学期全寮茶話会記事」(172号 1907年12月)では自治の意味を更に深く取りたいと述べ、自治は道德問題で、英国行政に見るも明らかであると言う。「第一九回寄宿寮創立記念祭記事」(185号 1909年3月)では自治は政治の根本で、英国の発展もこれをたどれば一村一部落の自治体によって訓練された人格と手腕とに基因する、と指摘する。

さて(2)では新渡戸の試みた作法やジェントルマン精神の一高への導入について触れ、(3)では一高の自治とイギリス人の自治の問題を扱った。それではこの作法と自治の精神は一高における教育とどのように関わっているのか。この点を検討することで、(2)の最後で指摘した、なぜ新渡戸が一高に文明的な作法を導入しようとしたのかについて答えたい。

#### (4) 教育論—パブリック・スクール教育と普通教育

新渡戸が一高において目指したのはイギリスのパブリック・スクールの教育であった。ある入学式の訓示では「英国のパブリックスクールでは、校長が身を以て模範を垂れ、徳望一校を感化する、そして大臣などよりも上におかれるといふ事であるが、日本ではまだ実現されてゐない」<sup>49)</sup>と発言している。校長辞任時の演説では、校長就任時に「自分で借金をしてでも良いから、一年ばかり外国をめぐり、校長学を研究してもらいたい。殊にイートン、ラグビー、

49) 大阪市立大学大学史資料室編(2003)9頁。『向陵記』は恒藤恭が一高に入学した1910年から1913年までの日記である。また矢内原(1940)135頁にも同じ趣旨の入学式訓示が掲載されている。



ハロー等の Public School を訪ひ、いかなる人が校長となっているか」見たいと頼んだと述べている<sup>50)</sup>。

では新渡戸はなぜパブリック・スクールを理想としたのか。新渡戸は晩年の早稲田大学における課外講義において、各国の大学教育を比較しつつ、イギリスのパブリック・スクールについて言及している。新渡戸がパブリック・スクールを理想としたのは、アメリカやドイツや日本と比べて、イギリスの教育が人間を造る教育、あるいは「人格の建設」に重きをおく教育であると見たからである<sup>51)</sup>。しかしこの人格教育は、大正教養主義が理想としたような古典や哲学の読書によってのみ行われるものではなかった。新渡戸は言う。

「現に大学の予備校、パブリック・スクールといつて、イートンの学校、或はウインチェスター、ラグビーの学校など、ここに八つから十七八まであるが、それらの八つ位からの小僧が、紳士的の態度でやらなければならない。誰も身をもしない。殊にイートンの如きは高帽を被つてゐる。倫敦に行つた方は御覧になつただらうが、実に可愛らしいほど小さい子が、シルクハットを被つてゐる。初めはをかしいが、その高帽に対して、何とはなしに身が締るものである。[中略] さういふ風に、英吉利の教育といふものは、ずっと紳士的の態度を、系統的に、下の方から上の方までやつてゐる」<sup>52)</sup>

このように新渡戸は、幼少の頃から系統的に紳士的な態度を身につけさせる教育を評価し、内面一辺倒の教育よりも外面、型の繰り返しから紳士的な作法を身につけることの意義を認めている。

さらに新渡戸は、こういった一貫したエリート教育が、英国の海外発展を支えているという。新渡戸はボルネオ島とオーストラリアでの体験として、イギリス人は現地の人々に囲まれて、周りに白人がいない場合でも、タキシードや礼服を着て食事をするという例を上げ、そこに「侵すべからざるところがあると思つた」と回顧している。そして実際、後藤新平民政長官のもとで自身が糖業事業に携わっていたころの台湾において、日本の役人に制服の制度を導入して成果を上げたという経験を挙げ、それに輪をかけたのがイギリス人だとして次のように述べる。

「英吉利のは法律から来たのではない。さういふ風に育つて来るのである。殊に大学教育を受けたものは、なほ更である。傍若無人なんといふ豪傑振りをもつて、理想としてはゐる

---

50) 前田多聞、高木八尺編(1936) 275頁。ただしこれは実現しなかった。

51) 新渡戸(1933) 415頁, 425頁。

52) 新渡戸(1933) 418頁。

い。他の人に対して、紳士として自分の身を処し、同時に他の人も紳士のやうに取扱ふといふところに、尊敬心が起る。傍若無人にやつて、人あれどもなきが如くに振舞ふのは、それは禽獣の思想である。植民地に行つても、植民地の土人とは親しみが薄いけれども、一番よく治めてゐるのは英吉利人である」<sup>53)</sup>

イギリス人には教育によって培われた紳士的な作法があり、傍若無人をよしとしない。そのようなイギリス人が植民地経営に最も成功している。新渡戸が、一高生の傍若無人を諷め、文明的な作法、紳士的態度を教えようとした理由のひとつは、将来の日本の海外発展におけるよき指導者を造るということであった。もちろんこれは晩年の発言であるが、一高の校長に就任する以前の台湾の事業に携わっていた時期からこういった点に注目していた事を考えると、新渡戸がかなり前から作法の重要性を認識していたことがわかる。

こういった作法はなにも植民地経営の文脈に限定する必要はない。新渡戸は一高生が日本国内の自治制度発展ひいてはデモクラシーの指導者となることを期待したが、そこにおいても上記のような作法、紳士的態度は必要となる。その証拠に、新渡戸はある県知事と旅行をした体験談として、日本の県知事の威厳が、人によって態度を変える「即座の威厳」「すぐ剥げるやうな威厳」であると非難している<sup>54)</sup>。

新渡戸の国内や海外植民地における統治にジェントルマン精神を求める姿勢は、1980年代にケインとホプキンスによって提唱された「ジェントルマン資本主義 (gentlemanly capitalism)」を連想させる。ジェントルマン資本主義の理論は、一九世紀末から二〇世紀初頭のイングランドの政治文化を支配した集団として、金融、流通といったサービス部門と専門職や公務を基盤とした新しい上流階級、いわゆるジェントルマン資本家を重視する<sup>55)</sup>。彼らジェントルマン資本家はその高い社会的地位によって政府部門と密接なつながりを持ち、そのようなコネクションの少ない産業部門より有利に立つことで、国内改革だけでなくイギリス植民地への投資や経営にも大きな影響力を及ぼしていた。

ジェントルマン資本主義の理論を詳しく検討する事は本稿の範囲を超えるし、また日本の海外膨張政策とイギリスのそれとを一概に同一視することはできないが、本稿との関連から一つ指摘できることは、パブリックスクールがこのジェントルマン資本家の形成に大きく貢献し、またそこでの教育が植民地経営にも生かされたという点である。彼らのエリートの価値観はパブリックスクール教育という共通の経験によって形成され、グループ内部の結婚を通じて強化され、ロンドンの「社交」界で誇示された<sup>56)</sup>。海外植民地においても、例えばインド統治は

---

53) 新渡戸 (1933) 419-420 頁。

54) 新渡戸 (1933) 420-421 頁。

55) Cane and Hopkins (1985), p. 2. (邦訳 54 頁)

56) Cane and Hopkins (1985), pp. 2-3. (邦訳 54 頁)

イングランド南部の専門職階級の出身でパブリックスクール教育を受けた子弟たちに行政職や陸軍といった海外での最大の就職先を提供した<sup>57)</sup>。そしてイギリスからの移住者の少ない従属植民地においても、植民地の行政官はパブリックスクールの価値観を熱帯地域の奥地に持ち込み、産業精神への軽蔑感を保持し、経済開発計画よりも、政治的、社会的安定の方を好んだ<sup>58)</sup>。

もちろん新渡戸の議論は、ジェントルマン資本家がイギリス国内で持っていたネットワークや影響力については触れていないし、またあまりにイギリス最良という面がないでもないが、新渡戸は自らの長い海外経験からこのようなジェントルマン指導者層の重要性を認識していたと思われる。新渡戸は東京帝国大学における植民政策論の第一人者であった。作法を重視する新渡戸の植民地経営観がかれの植民政策論とどのように結びついているかについては興味深いテーマであり、別のところで論じる機会を設けたいと思う。

こういったイギリス流のエリート教育を一高に導入しようとする一方で、新渡戸は普通教育の必要性も訴えた。「第二拾回寄宿寮創立記念祭記事」(195号1910年3月)では、一般社会と学校は切り離せないものであるとし、「民を新たにし、人を変化させんとすればまず学校を以って社会風化人民教養の源泉たらしめざるべからず」と説く。そして日本の教育制度が欧米と比べ一般社会とかけ離れすぎていて、学校が門戸を閉ざして社会の影響を受けることを好まないことを批判し、学問の目的は学俗の間隔を近づけることであるという。この時期新渡戸が『実業之日本』に執筆していたのもこのような信念があったからである。「第三学期全寮茶話会記事」(198号1910年6月)では general culture についてとして、欧米人と日本人との非常に優劣があるのは普通教育の駄目なことであると指摘する。このように新渡戸は一高については英国パブリック・スクールの教育を目指しつつ、知識の一般社会への普及としての普通教育の必要性を説き、また一高生が率先してそれを行うことを希望した。

##### (5) 新渡戸の指導者教育の成果及び指導者と民衆との関係

一高におけるソシアリティーや作法の導入は新渡戸を支持する学生には受け入れられたものの、一方で根強い反対にあった。特に運動部には従来の蛮カラ、弊衣破帽、勤儉尚武の校風を良しとする学生が多く、彼らの反発は例えば、1909年3月の茶話会における新渡戸校長弾劾事件などとして表面化する。こういった特に運動部からの批判は新渡戸の在任中根強くあり<sup>59)</sup>、尚武の精神や蛮カラを良しとする風潮は、旧制高校の伝統として消えることはなかったのである。

---

57) Cane and Hopkins (1985), pp. 13-14. (邦訳 67 頁)

58) Cane and Hopkins (1985), p. 15. (邦訳 68 頁)

59) 宮坂(1999)を参照。

それでは新渡戸に理解を示し強く影響を受けた学生たちは新渡戸の思想をどう受け継いだか。従来の籠城主義に違和感を持ち、新渡戸の人格主義やソシアリティーに共感した学生たちの中には後に大正・昭和教養主義を代表するようになる阿部次郎や和辻哲郎、河合栄治郎などがいる。この他にも、矢内原忠雄や南原繁などはキリスト教を通じて新渡戸に教えを受けた。新渡戸の説いた人格とソシアリティー、作法の中で、人格の観念は、教育基本法に人格の完成が明記されているように、現代にまである程度受け継がれていると言える。それではソシアリティーや作法はどうであろうか。この点については個別の人物を見ていく必要がある今後の課題としなければならない<sup>60)</sup>。

もちろん、新渡戸のパブリック・スクールの教育や紳士の作法の導入が成功したかを問題とする場合は、日本とイギリスの学校の制度的な違いを考慮に入れなくてはならないだろう。例えばパブリック・スクールの学生は「身分」エリートであったのに対して、旧制高校の学生は「業績」エリートであった<sup>61)</sup>。またイギリスにおいては紳士的な作法の習得は自国の貴族や騎士の礼儀作法を手本とするものであったのに対し、日本においてはそれは外国から取られたもの、つまり「作法の欧化」であった<sup>62)</sup>。一高において新渡戸のソシアリティーや作法が反発を招いたのは以上のような点に関係しているであろう。管見の限り新渡戸は旧制高校の制度的な改革に積極的に取り組んだ形跡はない。それは官立の学校である以上ある程度やむを得ないことであろう。むしろ新渡戸が試みたのは、『トム・ブラウンの学校生活』に登場するアーノルド校長が行った倫理講話や寮生活についての意識改革のような個人的感化による一高の改革であった<sup>63)</sup>。

最後に、新渡戸は一高校長として指導者教育を行うとともに『実業之日本』などを通して民衆の啓蒙にも尽力した。この指導者と民衆との関係について言及しておきたい。新渡戸が一高

---

60) 以下は仮説の域を出ないが、例えば和辻哲郎の倫理学や南原繁の共同体論が当時日本で影響力を持っていたドイツ哲学、特にカント哲学や新カント派に（その克服も含めて）影響を受けているのに対して、新渡戸のソシアリティーや作法は主にイギリスを手本としていた。新渡戸のソシアリティーや作法の概念は、非常に実地的で、プラグマティックなものである。矢内原忠雄は、新渡戸について「博士はドイツ流の観念分析を好む学者ではありませんでした。論理的分析を武器とする概念的学問に対し、意識的に反感を抱いてゐたと思はれる節さへあります」と回顧しているがこれは新渡戸の思想の一面を捉えている（矢内原（1940）143頁）。もっとも新渡戸が「縦の関係」から導かれる強い意思や理想を重視していた点を見落としてはいけない。その意味で新渡戸はカントの定言命法を評価しており、ドイツ哲学や理想主義を否定したと言ってしまうのも誤りであろう。新渡戸の思想を取り扱う場合常にこの二つの側面を意識しておくことが必要である。

61) 竹内洋（1999）166頁。

62) 西村（2008）29頁。また竹内洋（1999）234頁も参照。

63) 例えば『校友会雑誌』の「第三学期全寮茶話会記事」（198号 1910年6月）や大阪市立大学大学史資料室編（2003）9頁を参照。

の校長を務めていた時代は、民衆の力が拡大してくる時期と重なっている。Ⅲの(3)で触れたように日比谷焼打事件に始まる民衆騒擾は護憲運動や米騒動と続き、そこに第一次大戦後のデモクラシー思想の拡大が加わる。そしてデモクラシー運動はその後マルクス主義的な社会運動、労働者運動へと変容していく。有馬学は、1920年代に入ると国家の価値が相対化し、「国家や国家の政治ではなく、大衆の日常生活がその中にあるような社会」が初めて人々の前に実感を持って現れるようになり、そのような社会を埋め尽くすものとして大衆が登場した、と指摘する<sup>64)</sup>。国家とそれを動かすエリートと、そこに新しく登場する社会や大衆との関係を新渡戸はどのように考えていたか。また新渡戸のソシアリティーはそのような「社会」とどのような関係にあるか。

第一に、冒頭に述べたように、新渡戸はデモクラシーの重要な要素として「指導者の役割」と「民衆の指導者を選ぶ眼識」の二つを挙げた。新渡戸は『実業之日本』への執筆を通して、一般民衆の人格の観念を養うことを目指したが、それは上の二つの要素のうち後者を担うものであった。つまり大衆の登場と将来実現するであろう普通選挙の実施を見据え、一時の感情や状況に流されない国民の自主心を育てることを急務と考えたのである<sup>65)</sup>。紳士的な作法を身につけた指導者と、その指導者を適切に選ぶ民衆というのが新渡戸の描くデモクラシーといえる。

第二に、新渡戸は一般民衆に対しても一高生に対してもソシアリティーという言葉を使った。この二つの違いを本稿では強調したが、いずれのソシアリティーも、1920年代に登場した「社会」、具体的にはマルクス主義的な社会科学や社会政策、政府の行った社会調査の文脈で使われる「社会」とは異なる。もちろん、植民政策を専門とし、経済学を教えていた新渡戸が統計や調査に無関心であったはずはないが、少なくとも彼のソシアリティーは人と人との実際の交際を問題とする点で社会ではなくやはり社交である。社交は社会に比べれば理論性を欠くものかもしれないが、むしろ新渡戸は社会という抽象的なものよりも社交という具体的なものを重視し、あえて使用したのではないか。それは新渡戸が実務経験や長い海外生活から得た考え方であると思われる。現代的視点から評価すれば、個人主義化が進み社会というものの存在が見えにくくなるなか、むしろ人と人との交際を重視する社交にこそ、問題を切り開くヒントが隠されているかもしれない。

## おわりに

新渡戸は一高生に対しても、一般民衆に対しても人格の重要性と、ソシアリティーを説いた。その説き方は具体的な例を出して簡潔に、面白く説くという点では同じであったが異なる側面

64) 有馬学 (1999) 272 頁。

65) この点については山本 (2012) 100 頁を参照。

もあった。例えば、新渡戸は『修養』や『世渡りの道』においては武士道の用語やキリストの例を出しながらそれを説いたが、一高においては武士道やキリスト教を持ち出すことはなかった。それに対して、例えばジェントルマンやカントの定言命法などを持ち出した。これは状況に応じて解き方を変えるという新渡戸の特徴であるとともに、宗教それ自体よりその効果を重視する合理性、プラグマティックな側面、あるいは新渡戸の思想の寛容性を示している。それは、例えば新渡戸と同じ札幌農学校出身でキリスト教信仰に対して厳格であった内村鑑三などと比べて対照的と言えよう。

さらに新渡戸は一高においてソシアリティーを説き、籠城主義や蛮カラの校風に対して文明的な作法を導入しようとした。そこには日本国内や海外の植民地において指導者となるべき人物が紳士的な作法を持たなければならないという経験に基づく新渡戸の信念があった。ただし新渡戸は籠城主義の欠点を指摘しつつも、自治寮を否定するのではなく、一高生がそこで学んだ自治の精神を率先して広め、デモクラシーの発展に生かすことを期待した。新渡戸は自治的団体をデモクラシーの重要な要素と考えていたからである。新渡戸がデモクラシーにおける「指導者の役割」として期待したのは以上のようなことであった。このような指導者教育論はやはり一般民衆へ向けての修養とは区別されるべきものであろう。

しかし新渡戸が試みた作法の導入には限界があったと言える。一高の伝統的な籠城主義、尚武の精神、豪傑的態度はその後も根強く残ったからである。この伝統は、良い面では日本の武道の精神や運動部の精神として受け継がれているが、悪しき伝統としては戦前の陸軍の鉄拳制裁や、戦後では近年問題となった運動部における体罰などに受け継がれているように思われる。また教養主義者やドイツ観念論、あるいはマルクス主義を重視する日本の学界においても実際的な作法の問題は学問的な対象としては重視されて来なかった。新渡戸の説いた作法は単なる処世術、ハウツー本の領域でしか問題とされてこなかったと言えるかもしれない。しかし新渡戸はこの問題を日本国内外の統治の問題として捉えており、そういった観点からもう一度作法の重要性を考える必要があるだろう。

本稿においては特に後半、作法の問題に注目したが、新渡戸にはキリスト教的な人間と人間以上のものとの関係に基づく「縦の関係」としての人格主義があったことに再度注意を喚起しておきたい。新渡戸が従来の日本の形式主義を打破し人格としての平等と「千万人と雖も吾往かん」という気概、意志の強さを重視したことは間違いない。

こういった紳士の文明的な作法を持ちつつ、必要なときには「千万人と雖も吾往かん」といった気概を備えた指導者は、現在の政治家やその他指導者の理想像としても十分通用する。しかし残念ながら、政治的リーダーシップの欠如が問題とされる現代で、そのような人物を養成する機関が我が国にあるとはいえないのが現状ではないだろうか。その意味では、新渡戸の一高での試みはその数少ない例であり、現在でも見なおしてみる価値はあるだろう。



## 参考文献

- [1] 有馬学 (1999), 『日本の近代4 「国際化」の中の帝国日本 1905~1924』中央公論新社
- [2] 石井満 (1934), 『新渡戸稲造伝』関谷書店
- [3] 一高自治寮立寮百年委員会編 (1994), 『第一高等学校自治寮六十年史』一高自治寮立寮百年委員会, 一高同窓会
- [4] 大阪市立大学大学史資料室編 (2003), 『向陵記—恒藤恭 一高時代の日記—』大阪市立大学
- [5] 加藤節 (1997), 『南原繁—近代日本と知識人』岩波新書
- [6] 木村俊道 (2010), 『文明の作法—初期近代イングランドにおける政治と社交』ミネルヴァ書房
- [7] 草原克豪 (2012), 『新渡戸稲造 1862—1933 我, 太平洋の橋とならん』藤原書店
- [8] Cain, P. J. and A. G. Hopkins (1987), “Gentlemanly capitalism and British expansion overseas II: new imperialism, 1850–1945”, *Economic History Review*, 2nd ser. XL, I (1987). (邦訳竹内幸雄・秋田茂誌, 『ジェントルマン資本主義と大英帝国』I-2 新帝国主義 1850–1945, 岩波書店 1994年)
- [9] 小林竜一 (2011), 「第一高等学校校長としての新渡戸稲造—『籠城主義』との対決—」『社会学論集』Vol. 17, 早稲田大学大学院社会科学部研究科
- [10] 関口安義 (2012), 「評伝 矢内原忠雄 (二)」『都留文科大学研究紀要』第76集, 都留文科大学
- [11] 竹内久顕 (2009), 「新渡戸稲造の「教養思想」の今日的意義に関する考察」『東京女子大学比較文化研究所紀要』70, 東京女子大学比較文化研究所
- [12] 竹内洋 (1999), 『日本の近代12 学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社
- [13] 竹内洋 (2003), 『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』中公新書
- [14] 武田清子 (1967), 『土着と背教—伝統的エトスとプロテスタント』新教出版社
- [15] 筒井清忠 (1995), 『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波現代文庫 2009年
- [16] 筒井清忠 (2009), 『近衛文麿—教養主義的ポピュリストの悲劇』岩波現代文庫
- [17] 西村稔 (2000), 「教養と作法—覚書き1」『岡山大学法学会雑誌』第49巻3・4号, 岡山大学法学会
- [18] 西村稔 (2005), 『『欧化』と道徳—新渡戸稲造の道徳・礼議論 (二)』『岡山大学法学雑誌』第54巻第3号, 岡山大学法学会
- [19] 西村稔 (2007), 『『欧化』と道徳—新渡戸稲造の道徳・礼議論 (三)』『岡山大学法学雑誌』第56巻第3・4号, 岡山大学法学会
- [20] 西村稔 (2008), 『『欧化』と道徳—新渡戸稲造の道徳・礼議論 (五)』『岡山大学法学会雑誌』第57巻3号, 岡山大学法学会
- [21] 新渡戸稲造 (1911), 『修養』実業之日本社 (『新渡戸稲造全集』第七巻, 教文館 1970年所収)
- [22] 新渡戸稲造 (1912), 『世渡りの道』実業之日本社 (『全集』第八巻, 教文館 1970年所収)
- [23] 新渡戸稲造 (1919a), 「デモクラシーの根底的意義」『実業之日本』第二十二巻新年号, 1919年1月1日 (『全集』第4巻, 教文館 1969年所収)
- [24] 新渡戸稲造 (1919b), 「平民道」『実業之日本』第二十二巻第十号, 1919年5月1日 (『全集』第4巻, 教文館 1969年所収)
- [25] 新渡戸稲造 (1933), 『内観外望』実業之日本社 (『全集』第六巻 教文館 1970年所収)
- [26] 新渡戸稲造 (1934), 『西洋の事情と思想』実業之日本社 (『全集』第六巻 教文館 1970年所収)
- [27] 前田多聞, 高木八尺編 (1936), 『新渡戸博士追憶集』故新渡戸博士記念事業実行委員会 (『新渡戸稲造全集』別巻, 教文館 1987年所収)
- [28] 宮坂廣作 (1999), 「エリート教育と大衆の啓蒙—新渡戸稲造の再評価—」『法学論集』42, 山梨学院大学法学研究会
- [29] 森上優子 (2004), 「新渡戸稲造における調和—『修養』概念をてがかりとして」『日本思想史学』第36号, 日本思想史学会



- [30] 矢内原忠雄（1940），『世の尊敬する人物』岩波新書（『矢内原忠雄全集』第二十四巻 岩波書店 1964年所収）
- [31] 山本慎平（2012），「大正期における新渡戸稲造のデモクラシー論」『経済学雑誌』第113巻第2号，大阪市立大学経済学会
- [32] 和辻哲郎（1961），『自叙伝の試み』中公文庫 1992年
- [33] 『校友会雑誌』160号，第一高等学校校友会，1906年10月
- [34] 『校友会雑誌』163号，第一高等学校校友会，1907年1月
- [35] 『校友会雑誌』165号，第一高等学校校友会，1907年3月
- [36] 『校友会雑誌』169号，第一高等学校校友会，1907年10月
- [37] 『校友会雑誌』172号，第一高等学校校友会，1907年12月
- [38] 『校友会雑誌』175号，第一高等学校校友会，1908年3月
- [39] 『校友会雑誌』177号，第一高等学校校友会，1908年5月
- [40] 『校友会雑誌』178号，第一高等学校校友会，1908年6月
- [41] 『校友会雑誌』185号，第一高等学校校友会，1909年3月
- [42] 『校友会雑誌』192号，第一高等学校校友会，1909年12月
- [43] 『校友会雑誌』195号，第一高等学校校友会，1910年3月
- [44] 『校友会雑誌』198号，第一高等学校校友会，1910年6月